

『不寛容論』



森本あんにり 著

新潮選書
本体一六〇〇円

現代は罵倒が顕在化した時代である。自分の「正義」に基いて、考え方や生き方の異なる相手を口汚い言葉で攻撃する。議論は交わることなく、社会の分断は深刻化し、言葉に留まらず暴力という実力行使にまで発展することもある。それを憂い、人間の徳に頼って寛容を説く人々もいるが、その言葉はまったく届かない。

そもそも寛容とは、常に否定的な評価を前提とする。考えてもみるがいい。好ましいものは寛容の対象になり得ない。嫌いなものこそが対象となる。余裕のあるときならいざ知らず、自分の存在が危機に晒されているとき、嫌いなものは存在すら認めたくない。それ

が人間であろう。ヴォルテールの言葉として伝えられる(出典は定かでない)「わたしはあなたの意見に反対だが、あなたがそれを主張する権利は命をかけて守る」という言葉も、恰好はいいが、ジョン・レノンが歌う「イマジジン」のように空疎に響く。

著者は本書において、深刻化する分断を乗り越える実践的な倫理を、政教分離思想の実践者であるロジャー・ウィリアムズ(一六〇三年頃〜一六八三年)という狂信的なピューリタンを通して探ろうとする。ジェイムズ一世の治下、ロンドンのピューリタンの家に生まれ、ケンブリッジ大学で学んだウィリアムズは一六三〇年、結婚

したばかりの妻を伴って新天地アメリカへ旅発つ。背景にはもちろん、ピューリタン弾圧を強めるチャールズ一世の政策があった。

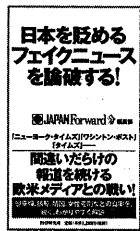
信仰は自らの良心のみに従うべきであり、たとえ他者が誤った信仰をしていても外部から信仰を強制してはならないとの信念を持つ彼は、教会と一体化したマサチューセッツ植民地政府による礼拝出席の強制などの不寛容な政策に対して、徹底的に異議申し立てをする。加えて、先住民から一方的に土地を奪った植民地の正当性をも問題にし、植民地政策を推進したジェイムズ一世を「嘘つき」、チャールズ一世を「悪魔」とまで言い放つ。

こうした過激な言論によって、マサチューセッツ植民地から追放されて放浪の身となった彼は、先住民の許可を得てプロヴィデンスに植民地を拓く。それまで批判者だった彼は、今度は多種多様なあぶれ者たちが流れ込んでくる植民地の建設者として、さまざまなトラブルに直面せざるを得なくなる。狂信的ピューリタンであり、信仰のうえで絶対に妥協することのない彼は、いかなる考え方によつて多様な人々が共存可能な植民地社会を建設していったのか。

結論から書こう。不愉快な隣人を尊重できなくてもかまわない。好きになる必要もない。必要最低限の礼節をもって遇すればよい、という実利的な考え方だ。銀座のデパート店員が中国人客を扱うように。寛容とはそれが出発点であり、ゴールなのかもしれない。

『日本を貶めるフェイクニュースを論破する!』

JAPAN Forward 編集部著
PHP研究所
本体二八〇円



自分の「正義」に基いて、考え方や生き方の異なる相手を口汚い言葉で攻撃する…。米国の朝日新聞」ともいわれるニューヨーク・タイムズはじめ、欧米各国のメディアによる日本叩きの数々をみるにつけ、その非寛容ぶりに天を仰ぎたくもなる。

欧米メディアは不勉強、無知のゆえに日本を貶めているのか。どうやらそうではないらしい。名門オックスフォード大学卒で長年、日本特派員を務めてきた英高級紙タイムズの記者が靖国神社を「戦

争犯罪者のための神社」と書き、駐日英大使の発言まででっち上げて報じているのだ。彼らの日本叩きは、もうどうにも止まらない。もちろん、海外メディアの特派員といえど日本語に不自由なまま着任し、数年で去っていく者も多く、不勉強で変な報道をする例もある。小池百合子都知事が「超保守派」で「日本初の女性首相になるかもしれない」と繰り返し海外で報じられるのを見ると、もはや「なんだかなあ」である。

日本と日本人の素顔を多元的、多角的に世界に発信する英語ニュース・言論サイト「JAPAN Forward」では、そうした海外の問題報道を取り上げ、反論を展開してきた。海外では「言わぬが花」は通じない。本当の日本の姿を、世界に発信し続けねばならない。(編集部)